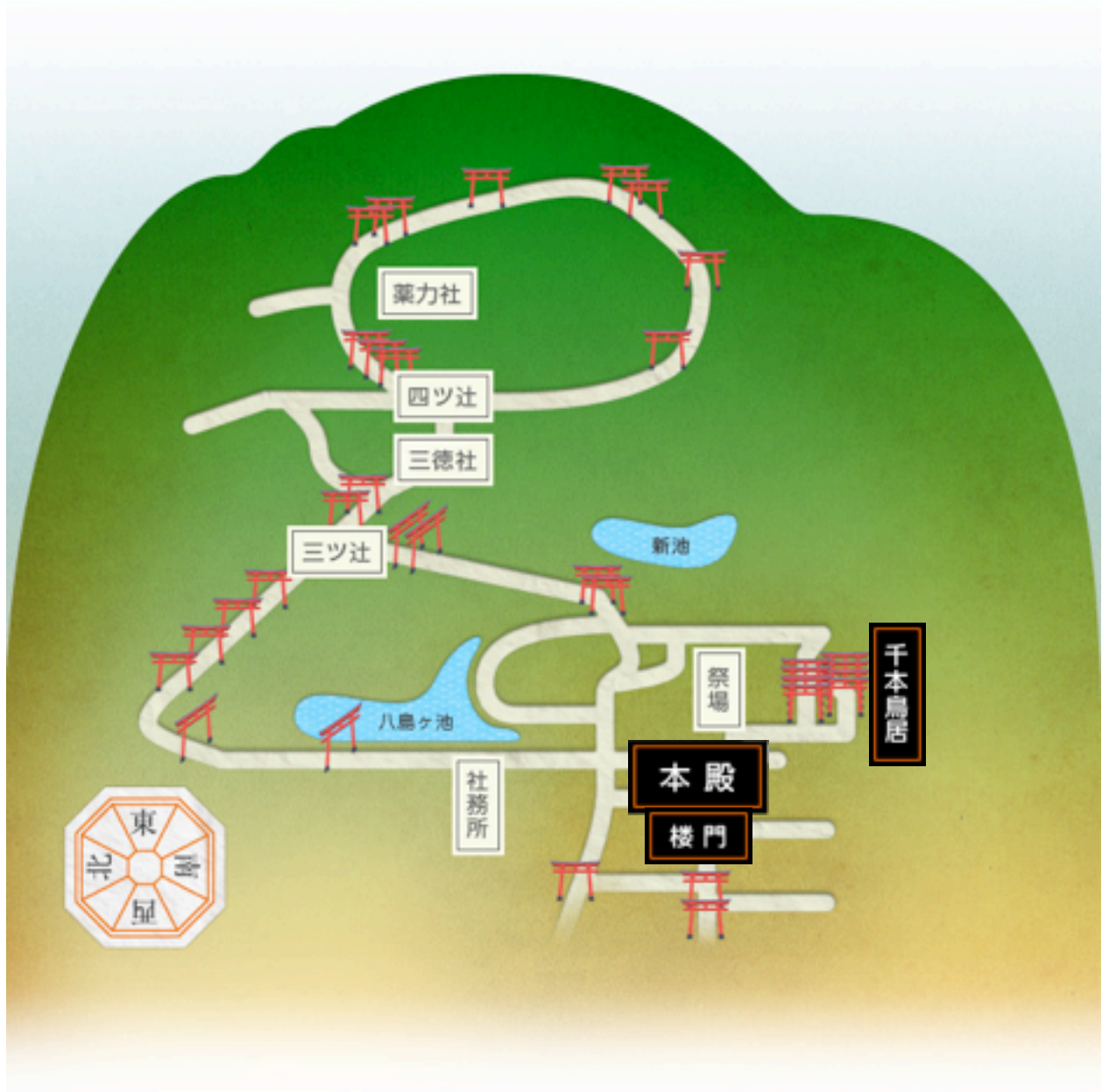


伏見稲荷山について

[伏見稲荷大社の公式ホームページ](#)によると、『稲荷信仰の原点が、稲荷山であります。当社の御祭神である稲荷大神様がこのお山に御鎮座されたのは、奈良時代の和銅4年（711）2月初午の日のこと。』・・・と説明されており、伏見稲荷大社の境内図として次の図が掲載されている。



楼門をくぐるとすぐに本殿がある。



楼門



御本殿側面



御本殿正面

立派な楼門と本殿である。本殿にお参りして帰る人も少なくないし、少し歩いて千本鳥居を
通って新池あたりまで行く人も少なくないと思うけれど、境内の奥、いわゆる稲荷山ま
で行く人は少ないようだ。しかし、伏見稲荷大社の真髄は、稲荷山にある。稲荷山はまこ
とに不思議なところで、こういうところは世界にないのではなかろうか。それではこれか
ら稲荷山の説明をしたいと思う。

稲荷山は、東山三十六峰の南端にある。

稲荷山は、縄文時代、弥生時代、古墳時代から現在まで、聖なる地として人々に崇められてきた。歴史的に見て、それぞれの時代に、人々は稲荷山を聖なる山として崇め、心を寄せてきた。したがって、稲荷山というのは、それぞれの時代の人々の心の染み込んだ不思議な空間となっている。このような不思議な空間というのは日本はおろか世界にもない。

このことについては、中沢新一が「[野生の科学](#)」（講談社）という著書の中で次のように説明している。すなわち、

『（比叡山からから発して東山に続く）山隗の最南端に、溪谷と「岬」が一体となった特異な地形がある。それが稲荷山である。アースダイバー地図を見慣れた目には、この「岬」の形状が縄文人にも弥生人にも、また古墳文化を伴ってこの地に入植した帰化人にも、ひとしく深い感銘をもたらしたであろうことが推測される。「岬」の先端部やその背後の山に抱かれた溪谷に、人びとは宗教的な意味を見出していた筈である。最初に埋葬地として注目されたのは、地形的に見ておそらく「御膳谷（ごぜんだに）」の溪谷であったろう。近代になって、この谷にも山頂部と同じような数多くの「塚」が築かれるようになったため、古代埋葬地としてのこの谷の原初の姿はすっかり見えなくなっている。しかし、この谷に向かって埋葬地として数多くの原始的な墳墓が設けられていたことは、大いに考えられる。』

『古代人が溪谷に死者を埋葬したのは、その地形が女性の身体を連想させるからである。馬蹄形の地形は古代の風水思想でも珍重されたが、それよりもずっと古い時代から人びとはこの地形に特別な意味を見出そうとしてきた。それは麓から見て、この地形が両足を開いて仰臥する女の身体を思わせるからである。しかも谷の奥からは清らかな水が流れ落ちている。溪谷の森は女性の産む能力の象徴であり、生身の女性を超えた女性の「アイデア」をあらわす地形であった。』

『稲荷山の山頂に築かれた古墳には、すでにこのような国家と権力の思考方法が浸透しているのである。暗い谷から引き出された墓所は、山頂の明るい光の中に、その偉容をあらわした。しかしそのときにも、御膳谷の湿気に満ちたほの暗い溪谷地では、昔ながらの死の思考をあらわす原初的墳墓の築造は続けられた。いや、じっさいの墳墓の築造はすでに行われなくなってしまったとはいえ、稲荷山は参籠し峰から谷への巡行を行っていた人びとの心の中には、古代からのモリの思想が生き続けていた。こうして、4世紀以来、稲荷山は日本人の死の思想をまるごと包み込む、特異な複合体として形づくられてきたのである。

そう考えれば、明治になって、庶民たちがこぞって、山頂といわず溪谷といわず、稲荷山の重要なスポットを「お塚」と呼ばれる奇妙な石造物で埋め尽くそうとする運動を始めたことにも、何か大きな意味が隠されているのではないか、と思えてくる。「お塚」築造の

運動を突き動かしていたのは、新しい国家と権力の理想をかたちを求める、変化への民衆の願望の表現だったのではないだろうか。』・・・と。

伏見稲荷神社の奥の院である稲荷山を含む一体は、異様な雰囲気のある宗教的空間である。生と死がひとつながりになった古代人の「ころ」を感じ得る希有な空間で、このような空間は他に見ることはできない。みなさんも是非一度はお出かけいただいて、是非、古代人の「ころ」を感じ取っていただきたい。

伏見稲荷神社の奥の院は、稲荷山にいたる広大な宗教的空間になっており、「お塚」と呼ばれる一種独特の「稲荷塚」が1万基ほどあるといわれているが、これがまさに圧巻である。

奥の院巡りを「お山巡り」といっているが、この「お山巡り」に関するホームページの中で、次のホームページをご紹介します。これをご覧いただき、奥の院の全体をまずは頭に入れていただきたいと思います。地図は上が東、右が南で左が北になっています。

http://souda-kyoto.jp/travel/walk/2012s_inari/index.html

稲荷山は東山三十六峰の南端、比叡山は東山の北端であり、その麓は伏見であり、北白川である。北白川には、北白川縄文遺跡群というのがあって、伏見には稲荷山の少し南の深草というところに縄文時代の谷口遺跡がある。縄文時代にも、木の実や山菜の採取や狩りのために、東山三十六峰を歩き回っていたものと思われる。稲荷山にも出かけて行って、中沢新一が言うように、縄文人が最初に埋葬地として注目したのは、地形的に見ておそらく「御膳谷（ごぜんだに）」の溪谷であったろう。

そういう埋葬地として稲荷山は、縄文時代、弥生時代、古墳時代の聖なる地として存在し続けた。伏見稲荷大社の歴史を考えると、そのことを忘れてはならない。

それでは、稲荷山を巡るオススメのホームページをここで紹介しておきます。

<http://burari.on.coocan.jp/fusimiihari.htm>

稲荷山にはあちこちに「お塚」があって、それぞれ特有の信仰があるようだ。磐座が祀られている「お塚」もあるし、石信仰の形態を持つものもある。共通しているのはすべて赤い鳥居が置かれている事だ。赤い鳥居は「狐信仰」の象徴だ。それではその様子を見ていただく。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/inarituka.pdf>

それでは、狐信仰がいつ頃から伏見稲荷大社で始まったか、その謂れを考えてみたい。結論を先に言えば、狐信仰は平安遷都の時に秦氏によって始められた。そのようなことは誰も言っていないが、私はそう考えている。それを説明したい。

伏見稲荷大社の公式ホームページでは、「当社の御祭神である稲荷大神様がこのお山に御鎮座されたのは、奈良時代の和銅4年（711）2月初午の日のこと」として、次のように説明している。すなわち、

『 当社の御祭神である稲荷大神様がこのお山に御鎮座されたのは、奈良時代の和銅4年（711）2月初午の日のこと。すなわち、秦伊呂具という秦一族の人間が、元明天皇の和銅4年(711)2月壬午の日に、**勅命によって**三柱の神を伊奈利山の三つの峰に祀ったのが、この神社の始まりとされている。』

『 和銅4年という年代が出てくるのですが、この年にご鎮座になった由縁として、この頃全国的に季候不順で五穀の稔りの悪い年が続いたので、勅使を名山大川に遣わされて祈請させられたときに神のご教示があり、山背国の稲荷山に大神を祀られたところ、五穀大いに稔り国は富み栄えた、この祭祀された日こそが和銅4年の2月初午であった、との伝承があります。これは全くそのとおりでと言えない面もありますが、唐突にこの日が伝承されたのではなく、やはり同氏族の間に何らかの明記すべき由縁があったものと推測されるのですが、それがどのような事象であったのか今のところはわかっていません。しかし強いて言えば、一族の族長、すなわち祭政を一人で行うあり方の中から、大神の祭祀を専門にする職掌が確立した時期であると考えてもよいのではないのでしょうか。』・・・と。

伏見稲荷大社の公式ホームページでは、大神の祭祀を専門にする職掌が確立した時期であると考えてもよいと明言しているが、その大神がどのような神なのかはよく判っていないとしている。しかし、秦伊呂具（はたのいろぐ）は**大和朝廷ゆかりの神**を祀ったのである。すなわち、和銅4年（711）2月壬午の日、深草の豪族である「秦伊呂具（はたのいろぐ）」は、勅命により三柱の神を伊奈利山の三ヶ峰に祀った。三つの峰には社殿が建てられ、三ノ峰（下社）は主祭神の「ウカノミタマノカミ」、二ノ峰（中社）に「サタヒコノカミ」、一ノ峰（上社）には大宮能売神が祀られた。

大宮能売神は、神祇官で祀られた天皇守護の八神のうちの一柱として、朝廷で重視された女神である。

ウカノミタマノカミ（宇迦之御魂神）は、須佐之男命（スサノオノミコト）と神大市比売（カムオオイチヒメ）から生まれた神で、『古事記』に記載されている。兄に大年神（オオトシノカミ）がおり、ともに穀物を司る神といわれている。

サタヒコノカミ（佐田彦神）は猿田毘古神（サルタビコノカミ）の別名。天照大神（アマテラスオオミカミ）の孫の邇邇芸命（ニニギノミコト）が高天原（天）から葦原中国（地上）に降りる際、天の八衢（やちまた）で邇邇芸命を待っていた地上の神で、葦原中国までの道案内をした。

秦伊呂具（はたのいろぐ）の祀った神は、稲荷山の神ではなく、朝廷ゆかりの神であり、おおよそ狐とは関係がない。狐を御眷属とするいわゆる現在の「お稲荷さん」は、平安遷都の後に出来上がったものと思われる。

三つの峰の末社には、現在、「阿古町（あこまち）」（下社）、「黒烏（くろを）」（中社）、「小薄（おすすき）」（上社）といった固有の名前を持つ白狐が祀られており、その白狐は稲荷神の神使（眷属）とされているが、後に「命婦（みょうぶ）」という官位が授けられ、「命婦稲荷神」として祀られるようになったものである。そして、この親神は、秦氏が、平安遷都にあたり、桓武天皇の意向を踏まえて、船岡山に命婦稲荷として祀ったものなのである。

私はすでに『義照稲荷神社の横に祀られる稲荷命婦元宮（いなりみょうぶもとみや）は、伏見稲荷大社の命婦社の親神であるとされ、「船岡山の霊狐」が祀られているされています。』・・・と述べたが、伏見稲荷山に命婦稲荷ができて、船岡山の命婦稲荷は稲荷命婦元宮（いなりみょうぶもとみや）と呼ばれるようになった。このようなことから、船岡山では、「船岡山の霊狐」伝説が語られるようになった。

以上に述べてきたように、伏見稲荷大社の狐信仰は平安遷都の時に秦氏によって始められたのである。その狐信仰は稲作を守る神として全国に広まった。新潟県津川は古き時代の狐信仰が今なお息づいており狐の行列が有名であるが、東京都王子でも狐の行列が行われている。